

中等教育研究開発室年報 第33号（2020年3月31日発行）別冊電子版
2019年度 授業実践事例

芸術科（音楽） 高等学校第I学年

器楽における演奏表現の可能性を探る

授業者 原 寛暁・増井 知世子

（教育研究大会 公開授業）

広島大学附属中・高等学校

高等学校 芸術科（音楽） 学習指導案

指導者 原 寛暁・増井 知世子

日 時	令和元年 11 月 29 日（金） 第 2 限 10:35～11:25
場 所	第 1 音楽教室
学年・組	高等学校 I 年芸術科音楽選択クラス ア組 55 人（男子 26 人 女子 29 人）
単 元	器楽における演奏表現の可能性を探す
教 材	E.ヴィラ=ロボス作曲「ブラジル風バッサ第 2 番第 4 楽章“トッカータ～カイピラの小さな汽車”（指導者による教材化編曲版）」

- 目 標
1. 習得した技能を元に、効果的な表現ができる。
 2. 自分自身のイメージを、他者に分かりやすく伝え演奏を向上させることができる。
 3. 生徒による指揮・演奏の関わり合いの相乗効果により、より良い演奏表現を求め高めていく基本的な態度を養う。

指導計画（全 11 時間）

- 第一次 教材（指導者編曲）の楽譜配布。楽曲の参考演奏の鑑賞を通してその特徴をつかみ、イメージを膨らませる。楽器のパート・セクション練習（教育実習生による指導を含む）3 時間
- 第二次 分奏練習と合奏練習（指導者指揮）を行う。生徒による基礎合奏の導入。2 時間
- 第三次 生徒全員にスコア（指導者編曲版）を配布し、参考演奏の鑑賞・スコアリーダーディング・指揮法の講習会。イメージを演奏へとつなげる具体的な方法を探す。
2 時間
- 第四次 生徒による合奏指導の定着。生徒による「指揮者リレー」を通し、指揮者・演奏者双方の視点から、イメージが演奏へつながるよう深め探していく。
4 時間（※ 第四次以降は主に生徒による主体的活動になるようにし、授業者は支援のスタンスで活動に関わるように留意する）・・・本時 3 / 4

授業について

本校の高等学校 1 学年芸術科は、選択クラスで週 2 時間連続の授業として展開している。通常は 2 時間のうち 1 時間は合唱活動または音楽鑑賞、もう 1 時間は器楽活動を行っており本校は変則的なオーケストラ形態での授業となっている。本計画で扱う教材は、ブラジルの E.ヴィラ=ロボス作曲の「ブラジル風バッサ第 2 番より第 4 楽章“トッカータ”」を、楽器初心者の多い生徒実態に配慮し授業者が教材化編曲をしたものを取り上げる。この曲は「カイピラの小さな汽車」という副題を持ち、蒸気機関車が走る様子を精緻に描写した「標題音楽（ある具体的な情景や状況などを描写した音楽）」として世界的に有名であり、演奏会のプログラムとして盛んに取り上げられている。残念ながら日本での認知度は低いが、生徒たちに経験させたい大変優れた楽曲である。対象クラスの生徒たちは、器楽・合唱に関わらず熱心に活動ができる。しかし楽器経験については 8 割が初心者で、2 割の経験者生徒が授業者と共に初期指導を行い、1 学期の間はその楽器に慣れることをまず目標に、基礎的な演奏法を学習してきた。2 学期に入ってから、オーケストラ形態での授業に移行し、まだまだこれからという段階であるが徐々にこの形態での授業に慣れてきた。普段は複数のホームルームクラスにまたがった集団であるため、意見交流のような活動には慣れていないのが課題である。本授業計画では、生徒たちが演奏体験を通し表現を深めるなどのプロセス・可能性を発

見していくこと、をねらいとしている。今後は、他の楽曲や多様ジャンルの音楽表現に取り組む際にも持続可能な、基本的な態度を培うことを期待するものである。

題 目 生徒が主体的に深め探す器楽活動の試み～生徒による指揮者リレーに挑戦～

本時の目標

1. 標題音楽のイメージを大切にしたり、様々な表現の可能性を試す。
2. 指揮者・演奏者双方の意見交流を通し、表現の幅を広げる。

本時の評価規準（観点／方法）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	イメージに基づき、演奏方法を考え試す。 ／生徒観察・ワークシート	生徒相互の意見交流が進み、演奏が向上している。／生徒観察

本時の学習指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点
<p><導入></p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の流れと学習目標の確認 ・音出し、個人練習 <p><展開></p> <p>生徒による指揮リレー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒Aによる部分練習（自分のイメージを全体に伝える）→部分合奏→生徒Aによる演奏評価 → 再度部分合奏 → 評価 → 生徒Aが生徒Bを指名 ・生徒Bによる指揮 → 以下同様 ・生徒Cによる部分練習 → 以下同様 ・生徒D → 生徒E → 生徒Fを指名 <p><まとめ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・まとめの通し合奏 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽器など必要なものを用意し、第1音楽室で合奏隊形で始業することを確認する。 ・「指揮者:この部分はこんな感じで演奏してほしい。」 → 「そのためにはどうすれば?」を考え、演奏者側から指揮者に提案する場面があっても良い(テクニカルサポーター)。 ・各指揮者、上に同じ ・生徒による通し合奏(加速部分は、授業者がサポート?) 	<ul style="list-style-type: none"> ・10:00～楽器準備と音出しを可とするが、隣の教室での授業に配慮し、閉め切ることを指導する。 ・授業者は、生徒の思いを整理し橋渡しし、やろうとしていることを「支援する」ことに留意する。 ・授業者及び各楽器の経験者生徒は、各指揮者の持つイメージを音につなげるための支援(テクニカルサポート)を自然に行えるように、促す。 ・「指揮者、演奏者によって解釈が異なることは自然なことであり、それこそが音楽の多様性=面白さの1つである。」ことを押さえる。(まとめ) ・次時の予告 → 片付け指示
<p>備考</p> <p>楽器、楽譜(パート譜、スコア)、譜面台、筆記用具 など</p>		

実践上の留意点

1. 授業説明（研究大会）

対象クラスは、高等学校 I 年芸術科音楽選択クラス ア組 55 名（男子 26 名 女子 29 名）であった。単元は、「器楽に於ける演奏表現の可能性を探す」とし、標題音楽（ある具体的な情景を描写した音楽）を教材化したものに取り組んだ。単元目標として、1.「習得した技能を元に、効果的な表現ができる」2.「自分自身のイメージを、他者に分かりやすく伝え演奏を向上させることができる」3.「生徒による指揮・演奏の関わり合いの相乗効果により、より良い演奏表現を求め高めていく基本的な態度を養う」とした。

全 11 時間の指導計画の中で柱としたのは、生徒による合奏指導「指揮リレー」の定着である。初期段階では、オーケストラの前に立つことを恥ずかしがったり躊躇をしたりする生徒も多かったが、指揮リレーが定着していくにつれて抵抗は無くなっていき、どの生徒もそれぞれ个性的で堂々とした合奏指導が出来るようになっていった。楽器経験について、ほぼ 8 割の生徒たちが初心者であるので、演奏水準もそれなりである。普段は複数の HR クラスに跨がった集団であるため、意見交流のような活動には慣れていなかった。本指導計画では、生徒たちが演奏経験を通して表現を深めるなどのプロセス・可能性を発見することを主眼とした。授業者の適切なコントロール（テクニカルサポート）を心がけたが、中学生対象の授業と比較して、その度合いは少なくすむ傾向にあった。生徒の中学生⇒高校生の過程での音楽的力量の成長・発展の大きさを感じる場所である。

2. 研究協議より

- ・生徒指揮者（リーダー）のいずれもが、とても意欲的で頑張っていた。
- ・指揮者の要求について、オーケストラの演奏者もその意図をよく汲み取って演奏に反映しようとしていた。
- ・楽曲の編曲教材化の工夫も、良かった。
- ・教材化の過程で省かれた部分（原曲に書かれていた細かなニュアンス）が音楽的に大切な要素なので、技術的に難しくとも取り入れるべきだったと思う。
- ・著作物の著作権年数は近年変更されているので、留意すべき。

